

【論文4】

由旬 (yojana) の再検証

森 章司

本澤 綱夫

【0】はじめに

[1] 釈尊は成道後45年間、ヒンドゥスタン平原各地を遊行され、衆生教化に専念された。我々はこの間の釈尊の行跡を原始仏教聖典によって跡付け、釈尊年表を作成し、最終的には釈尊の伝記とその教団形成史を書くことを目指しているが、乏しい史料の中でこの足跡を時系列的に辿ろうとすれば、遊行がどのようになされたのかを正確に把握しておく必要がある。

[1-1] 例えば“Mahāparinibbāna-suttanta”（大般涅槃經）では、最後の雨安居を竹林村（Beluva-gāmaka）で過ごされた後、ヴェーサーリーで3ヶ月後に入滅すると宣言されてから、クシナーラーに到着され、その日に入滅されたとされている。本モノグラフ・第1号の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」において述べたように、それは中国暦の2月15日（ヴェーサーカ月の満月の日）に相当する。もしこの記事を信じるならば、釈尊は前の年の11月16日にヴェーサーリーを出発されて、ちょうど3ヶ月を要してクシナーラーに到着されたことになる。

釈尊は竹林村で最後の雨安居を迎えられたときに満80歳を迎えられたが、これも上記論文に述べたように、入胎から数えるその誕生日は4月15日であるから、ぴたりと符合する。

[1-2] このように釈尊の80歳の事績は『大般涅槃經』によってそのおおよそをたどることができるが、それでは79歳の時の事績はどうであろうか。

『大般涅槃經』は王舎城の靈鷲山から始まるが、ここではヴァッジ族を征服しようとしていたマガダ国の阿闍世王の使いの訪問をきっかけとして、近くに住していた比丘たちを呼び集めて7不退法などを説かれてから、ヴェーサーリーに向けて靈鷲山を出発されたとされている。その後釈尊は阿難を連れて、アンバラッティカー（Ambalaṭṭhikā）園、ナーランダ、パータリ村を経由してガンジス河をわたり、さらにコーティ村（Koṭigāma）、ナーディカ（Nādika）村を経てヴェーサーリーに至り、その後竹林村に到着されたとされている。

もしこれが雨安居の直後の事績であるとするなら、79歳の雨安居は王舎城の靈鷲山で過ごされたのであって、これによって79歳の事績のおおよその想定が可能となる。すなわち釈尊は79歳の雨安居を靈鷲山で過ごされてから、おおよそ3ヶ月くらいをかけて竹林村まで遊行されたのであり、これはほぼ80歳の時の遊行の条件と等しい。どのルートを取られたかによって多少の相違があるが、後に述べるようにヴェーサーリーからクシナーラーまでは188 km、王舎城からヴェーサーリーまでは157 kmであって、現在のところ竹林村がどこか同定できないが、ヴェーサーリーから竹林村までの距離を加えるとほぼ同じくらいになるからである。

[1-3] しかし80歳の釈尊は大きな病気をされた後のことであって、特に遊行のスピードは遅かったかもしれない。とするならばその前年の遊行は例えば舎衛城から王舎城まで来

られて、7不退法などを説かれ、さらにヴェーサーリーにまで遊行されたのかもしれない。本モノグラフに載せた【論文5】に記した通り、後世のパーリの釈尊の雨安居地伝承によれば、最後の雨安居地を除く晩年24年間の雨安居地は舎衛城であったとするからである。そうするとこれもどのルートを取ったかが問題となるが、舎衛城と王舎城の間は約600 km前後あるから、この年は実に800 km近い距離を遊行されたことになる。

[1-4] はたして79歳の遊行は、上記の2つのケースのうちどちらの方が正しいのであろうか。この結論を得るためには、普通釈尊の遊行された時期は何月頃で、何日間くらいをかけられ、1日にどのくらいのスピードで歩かれたのかが判らないと話にならない。「遊行」の詳細については次号の本モノグラフに掲載する予定の論文で詳しく検討するが、現時点ではわれわれは、釈尊の遊行は普通の場合、古い中国の暦でいうなら11月半ばから2月半ばの約3ヶ月が使われたのではないかと推測している。先述したように『大般涅槃経』でも同じであったわけである。そうすると後は1日に平均して何キロくらい歩かれたかが判れば、遊行のおおよその最大距離が想定されることになる。

[1-5] ちなみに“Jātaka”の‘Nidānakathā’<sup>(1)</sup>は、成道後の釈尊は「王舎城を出発して日々1由旬を進み (divase divase yojanaṃ gacchati)、王舎城からカピラヴァットゥまでの60由旬を2ヶ月で着こうと、急がない旅に出発された (Rājagahato saṭṭhiyojanaṃ Kapilavatthum dvīhi māsehi pāpuṇissāmīti, aturitacārikaṃ pakkāmi)」とする。われわれは王舎城からカピラヴァットゥまでの距離を693 kmと想定しているから、この記述を信頼するとすれば、この時には1日に約11.6 kmを歩かれたことになる。そうだとすれば1由旬は約11.6 kmということになる。しかし先の『大般涅槃経』の場合は約190 kmを90日間かけて遊行されたのであるから、これをもとに計算すると1由旬は2.1 kmにしかない。もっともこれは79歳、80歳の釈尊の遊行であり、前者は成道直後の若い釈尊の遊行であるから比較にはならないかもしれない。これには体力だけではなく、例えば途中の村々での歓待ぶりなど遊行の内容の相違も勘案しなければならないであろう。

(1) vol. I p.087. 他に1由旬とするものには“Jātaka” (vol. I p.092) がある。

[1-6] ところで、先の‘Nidānakathā’は釈尊の1日の行程を1由旬とするのであるが、実は他に釈尊の遊行は1日に2由旬とするものもあり<sup>(1)</sup>、また半由旬とするものもあるから<sup>(2)</sup>、これ自体を検討しなければならない。しかしそれも1由旬がどれくらいの長さを指すのかが分かってこそ、はじめて意味を持つことになる。

しかしながら今まで「由旬 (yojana)」の長さについての確たる説が存在しなかったと言ってよい。そこで本稿では「由旬」を再検証し、我々が目指している本研究の主題を探求するための一つの手懸りとした。

(1) 『根本有部律』波逸底迦044 (大正23 p.829下) は「世尊一日可行幾許。阿難陀曰、猶如輪王。復問、輪王之法日行幾多。答曰、兩踰繕那。時諸商人准当程路每兩踰繕那安置所須。於日初分供仏及僧、食既了已商人前去、如是准置乃至室羅伐城」とする。

(2) 『十誦律』臥具法 (大正23 p.244中) は「王舎城の用件を済ませた給孤独長者は、舎衛國に歸る途中、仏のために講堂・温室・食堂・食厨・洗浴處・門屋・大小便處を作る事を宣言し、世尊が宿泊されるべき場所で、半由旬ごとに、僧坊を起こした」とし、『釈迦譜』 (大正50 p.064中) は「須達問言、世尊足行日能幾里。舍利弗言、日半由旬、如轉輪王足行之

由旬 (yojana) の再検証

法、世尊亦爾。是時須達、即於道次二十里作一亭舎」とする。